大祓詞はらへことば

災高津鳥の災畜殪し蠱物せる罪許々太久の罪出でむ此く出でば天つ宮言以ちておざれないないとのない。まじもの みここだく みい 天つ金木を本打ち切り末打ち断ちて千座の置座に置き足らはして天つ管麻を本刈りのまかなぎ もとう きょうがん たんち おきくら おきこく ちょう まま すがそ もとか 己が子犯せる罪母と子と犯せる罪子と母と犯せる罪畜犯せる罪昆虫の災高津神のまのことがる。 天一罪とは畔放ち 溝埋め 樋放ち 頻蒔き 串差し 生剥ぎ 逆剥ぎ 尿户 許々太久 ろし食さむ国中に成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は 雲を伊頭の千別きに千別きて天降し依さし奉りき此く依さし奉りし四方の国中と 神議りに議り賜ひて我が皇御孫命は豊葦原瑞穂国を安国と平けく知ろし食せと事がははかったました。 高天原に神留り坐す。皇親神漏岐、神漏美の命以ちてたかまのはら、かむづま、ま、すめらがむつかむろぎ、かむろみをとも 断ち末刈り切りて八針に取り辟きて天つ祝詞の太祝詞事を宣れた。まかま 大倭日高見国を安国と定め奉りて下つ磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知りないを見るのくに、ますいまで、まっては、ないばらなどし、たったがまのはら、たっだったがあります。 依さし奉りき此く依さし奉りし国中に荒振る神等をば神問はしに問はし賜ひ神掃 の罪を天津罪と詔別けて国津罪とは生膚断 死膚断 白人胡久美 己が母犯せる罪る なまっる のか はなかる とにだち しらなこくみ まの はまかる ひに掃ひ賜ひて語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて天の磐座放ち天の八重は、ないないない。 皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて天の御蔭日の御蔭と隠り坐して安国と平けく知すめぬまのみとる。 かなかがまっ まっ あめみかげ ひみかげ かくま 八百万神等を神集へに集へ賜ひゃはいるのかなない

## 天一祝詞の太祝詞)

罪と言ふ罪は在らじと被人給ひ清め給ふ事を聞こし食せと恐み恐みも白する 佐須良比売と言ふ神 持ち佐須良ひ失ひてむ 此く佐須良ひ失ひてば 今日より始めてはすら ひめ に坐す速開都比売と言ふ神、持ちかか呑みてむ、此くかか呑みてば、気吹戸に坐す気吹き、はないないないない。 大海原に持ち出でなむ此く持ち出で往なば荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会 本を焼鎌の敏鎌以ちて打ち掃ふ事の如く遺る罪は在らじと祓へ給ひ清め給ふ事を高した はいまま とがまも たま まま たま こと ここ る まま はら たま きょ たま こと たか 辺に居る大船を 舳解き放ち 艫解き放ちて 大海原に押し放つ事の如く 彼方の繁木がべて を ははなる なんと はな ともと はな おまらなばら お はな こと ごと をちかた しげき こし食さむ国つ神は高山の末短山の末に上り坐して高山の伊褒理短山の伊褒理を 掻き別けて聞こし食さむ此く聞こし食してば罪と言ふ罪は在らじと、科戸の風の天のかられる。 八重雲を吹き放つ事の如く朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き払ふ事の如く大津やへでも、ふないはないというと、などのの御霧を朝風夕風の吹き払ふ事の如く大津の